

肉用牛 (繁殖) の集団管理における経営経済的評価

大滝典雄・竹下有之・*家入信義・鳴川成清・*那須利八・*恒松正明
(熊本県畜産試験場阿蘇支場・*熊本県畜産試験場・**熊本県農産普及課・***熊本県球磨事務所)

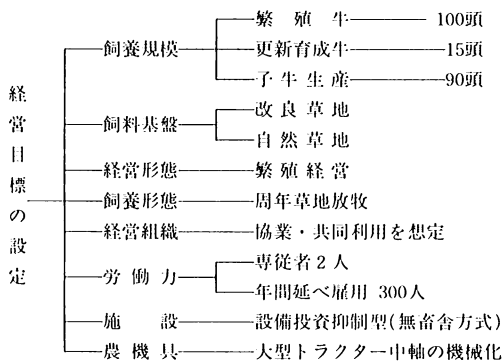
OTAKI, N., Y.TAKESITA, N.IEIRI, N.NARIKAWA, R.NASU and M.TSUNEMATSU: Economical Evaluation of Large Size Management of Beef Cattle Production

阿蘇高原地域を対象に1975年より広域農業開発事業が始まり、広大な草地造成により肉用牛の生産基地づくりが進んでいる。この事業の先駆的・モデル的役割を果たすため、開発用地と試験の立地条件・規模をほぼ同一とした組立試験(1975年～1979年・総合助成)を行い、肉用牛の集団管理技術と併せて経営経済的な面からも検討し成果を得たので報告する。

1. 試験方法

- (1) 試験地: 畜試阿蘇支場内、波状丘陵の改良草地
- (2) 経営目標の設定

第1表 経営目標の設定



(2) 主な素材技術

A S Pによる放牧期間延長技術や集団管理技術については、九農研第41～42号に報告したので参照されたい。

(3) 経営調査上(複式簿記)の約束事項

改良草地・施設・大農具等は補助事業による圧縮計算とし、耐用年数は省令を適用、償却は定額法による。資金は公庫の総合資金(6,700万円利率5%)を想定した。

2. 試験結果

(1) 子牛の売上原価と販売単価

第2表 売上原価と販売単価 単位:千円

区分	目標	1976年度	1977年度	1978年度	1979年度
組立試験	売上原価	170	225	209	245
	販売単価	220	221	184	240
統調	生産費調査(参考)	-	300	306	327

注) 1. 売上原価とは(生産原価費用-棚卸増減)÷売上頭数(子牛)
2. 販売単価は、年間子牛売上高÷販売頭数

(2) 損益計算書

第3表 損益計算書 単位:万円

科目	目標	1979年度	科目	目標	1979年度
畜産収益			棚卸増減		
子牛売上高	1,650	1,780	期首棚卸高	1,000	1,095
成牛処分益	300	340	期中成牛振替	350	321
合計	1,950	2,120	期末棚卸高	1,100	1,082
濃厚飼料	500	413	棚卸増減	450	309
乾草	0	87	差引売上原価	1,278	1,475
肥	300	292	売上総利益	672	642
材料資材	50	24	一般管理費		
衛生薬品	20	25	事務費	10	-
精液	13	9	旅費・通信	10	10
労働			保険料	20	9
専従	320	256	営業利益	632	623
臨時	40	85	営業外費用		
機械			支払利息	175	175
償却	60	87	共済掛金	32	43
修繕	20	17	当期純利益	425	405
牛減価償却	200	228			
施設					
償却	130	142			
修繕	20	36			
牧草地償却	15	20			
賃料・料金	10	11			
燃料・光熱	25	49			
作業衣	5	3			
合計	1,728	1,784			

注) 子牛の販売頭数は目標75頭、1979年度実績52頭、成牛処分頭数は同じく15頭と実績7頭。

3. まとめ

この組立試験で生産構造の解析が計画→実施→記録→分析→改善という連続の中で自己分析ができ、技術と経営経済的な指標を得たことは、この試験の目的である広域農業開発事業のパイロット的役割を果たしたものと自己評価している。

(1) 畜産収益については、販売頭数目標75頭に達しなかった。これは、生産率が目標よりやや低く、放牧による発育遅延が販売月齢の延長となったことによる。

(2) 生産原価費用が濃厚飼料23～29%、労働18～20%、肥料16～18%となり、序列と比率は各年次とも安定しているので、経営の指標として活用できる。

(3) 子牛の売上原価が販売単価>売上原価となったのは、1978～1979年度であり生産費調査と対比すると、この試験の生産コストの低さがうかがわれる。